

# 津雲貝塚出土資料整理報告（2022年度）

山口卓也 関西大学博物館非常勤研究員

## 1 はじめに

津雲貝塚出土資料に関しては、2021年度までの実資料と台帳の基礎的な種別点数確認作業に続いて、2022年度は、石器類と獣骨類、貝類など自然遺物について確認作業を開始した。そのうち、石器類について実数と分類が確定したので、一部について実測図の作成を行った。ここでは、整理作業の2022年度報告として、津雲貝塚出土石器類の概要を報告したい。

## 2 津雲貝塚出土資料の石器類

石器類は、本山コレクションの台帳と実収蔵資料を突き合わせ、MY-S0593の石鏃5点と削器1点、加工痕ある剥片1点、石器未成品1点の計8点、0594の削器2点剥片2点の計4点、0597の削器7点剥片8点の計15点の実資料を確認した。さらに一括取り上げの打製石錘1点と叩石1点の2点を合わせると、合計30点を所蔵している。台帳0595の石器石材4点は実資料を確認できなかった。以下、実測図を掲示して概要を紹介する。

石鏃（1-5） 1-3はサヌカイト製で、凹基のものと小形三角平基のもの2点がある。4と5は漆黒色の良質黒曜石製で、緻密な押圧剥離が観察できるが、基部を破損している。削器（6-14）はサヌカイト製で、6は横長剥片幅10cmの短冊状素材に両面加工を施したもの、7・8・13の折断した素材のもの、そのほかの不定形剥片素材のものに両面または片刃加工を施したものがある。剥片類（15-24）はサヌカイト製で、いずれも大形板状剥片に折断面や破断面がある。一部には加工痕や使用痕と思われる小剥離の連続が認められる。20は厚手大形剥片を加熱破断したものである。石器未成品破片（25）は泥板岩製で、石棒や石刀などの未成品と思われる。打製石錘（26）は片岩製で、上下に打ち欠きを設ける。93.14gを測る。叩石（27）は石英岩製で、表裏中央と先端、側面に敲打痕がある。708gを測る。

## 3 石材供給と津雲貝塚の石器石材

所蔵津雲貝塚出土資料中の石器類は、黒曜石製石鏃や礫石器等を除くと、サヌカイト製である。笠岡市の調査報告では、津雲貝塚のサヌカイトは、四国讃岐の金山産出であることが判明している。今回整理した剥片類や削器の素材剥片の多くが大形板状剥片を折断切断分割した素材の形状を保っていることは、瀬戸海峡を渡る四国讃岐地方の金山から笠岡市津雲貝塚までの石材供給が、原石塊や製品段階の搬出ではなく、臨機生産に対応した素材としての汎用性を担保した状況を示していて、笠岡市報告で集成された資料群と同様の結果となった。

黒曜石製石鏃は、漆黒緻密の石質から山陰隠岐島産のものであることを予測するので、遠隔地石材である。近接地石材としては、津雲貝塚に近接する東に約8kmの鷲羽山周辺に流紋岩石材産地がある。

遠隔地石材は、船による運搬が必須となるサヌカイト産出地金山から津雲貝塚まで約40km、黒曜石産出地隠岐島から海と山塊に隔てられて約180kmとなる。

津雲貝塚の石器類を考察するうえで、石材搬入のありかたと石器生産技術、遺跡での石器と石材消費の動態を検討する必要があるだろう。

#### 参考文献

笠岡市教育委員会2020『津雲貝塚総合調査報告書』

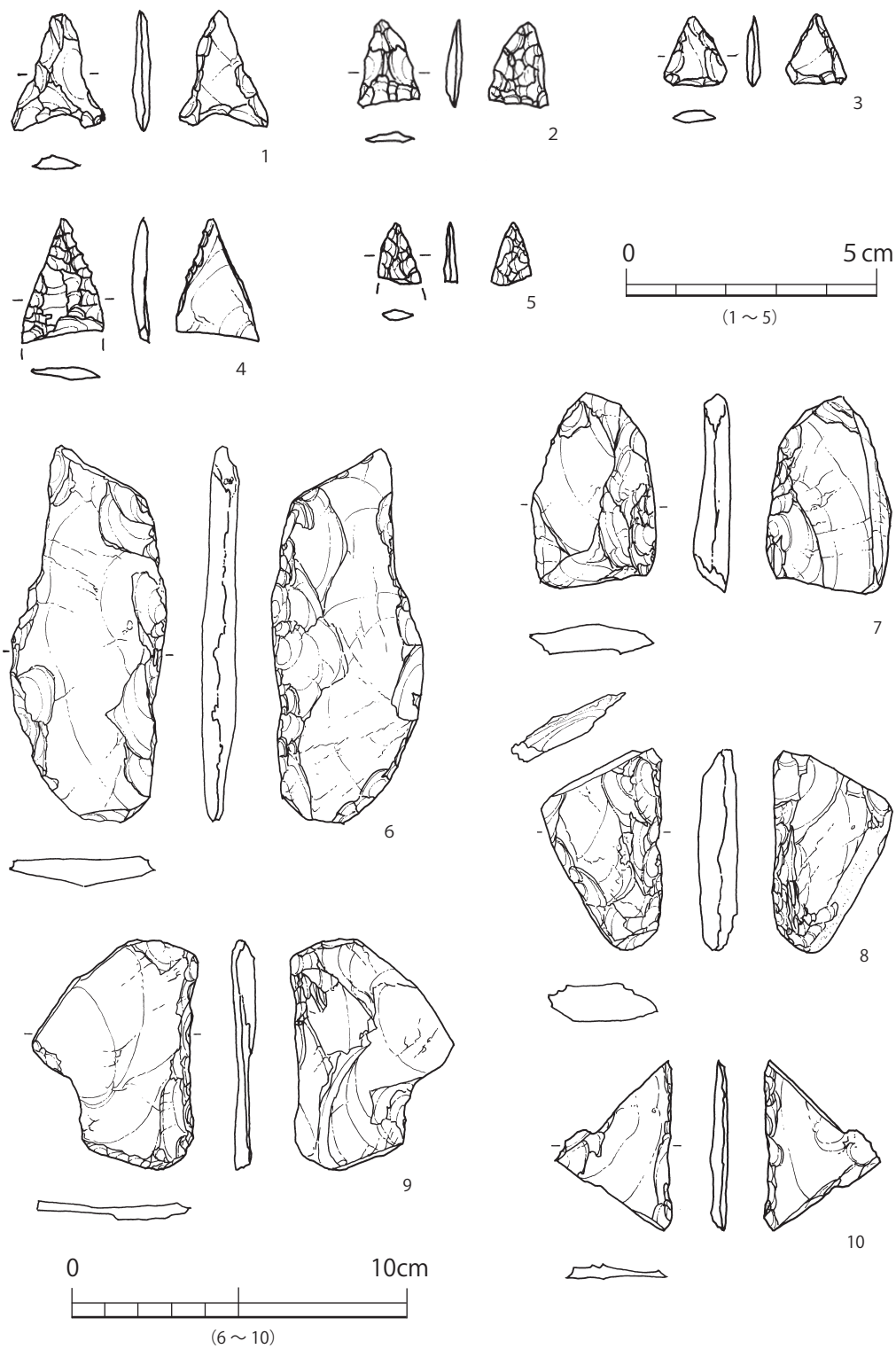


图1 津雲貝塚出土石器①

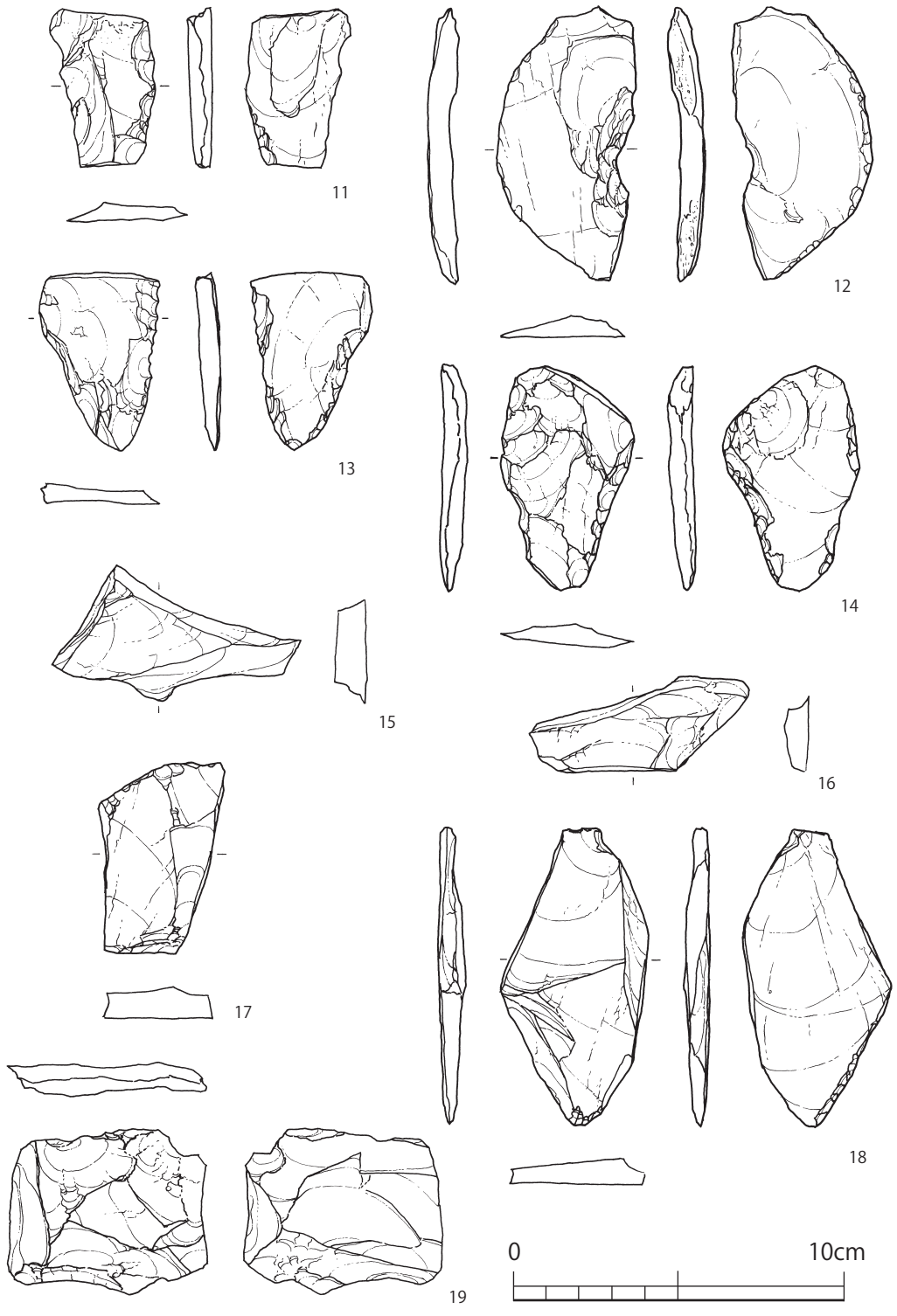


图2 津雲貝塚出土石器②

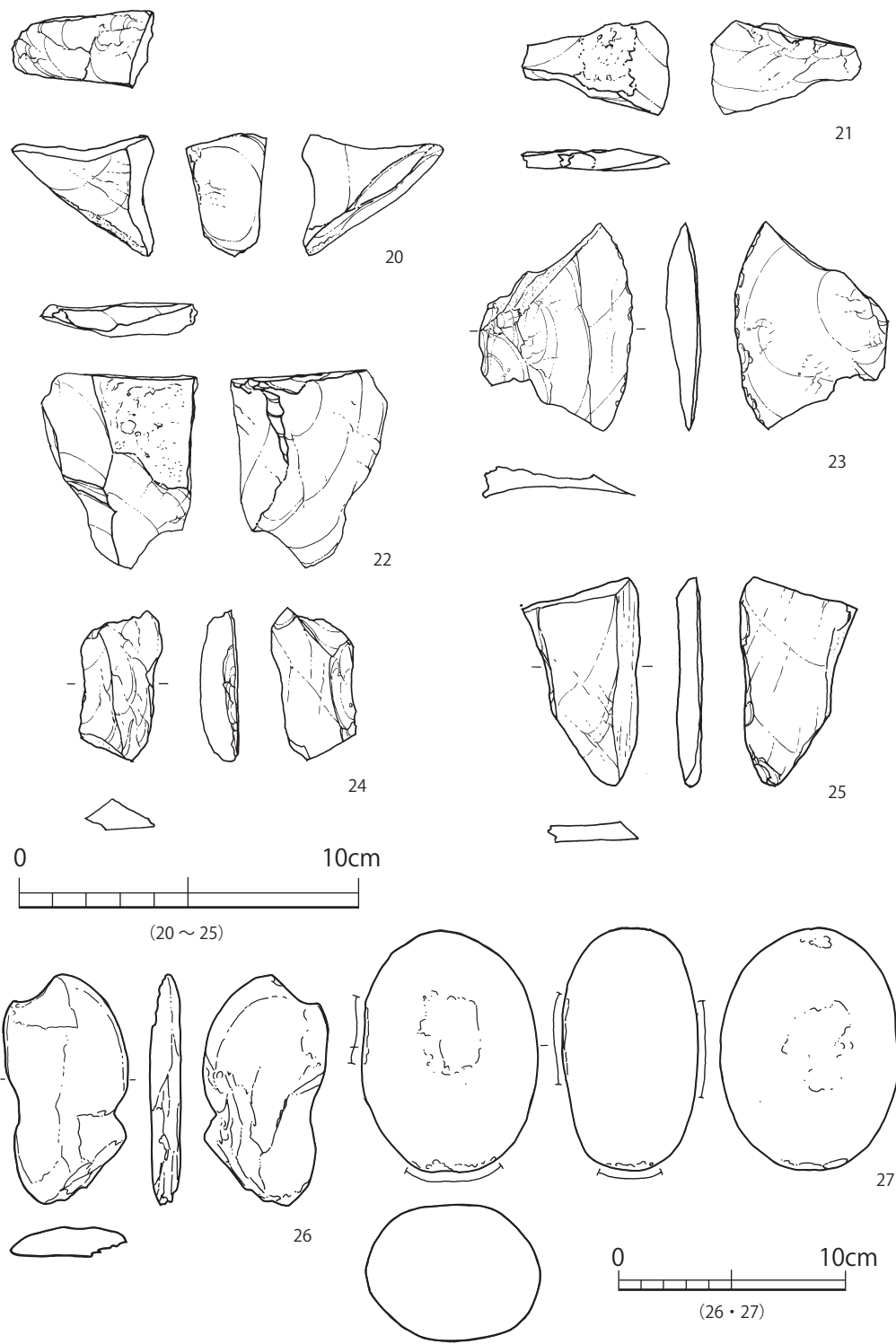


图3 津雲貝塚出土石器③

